

---

# MIDNIGHT • TV

†アラクネ†

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MIDNIGHT・TV

### 【Zコード】

N4278B

### 【作者名】

十アラクネ+

### 【あらすじ】

職と共に全ての栄光を失った、かつてのエリートサラリーマン。彼はある日「ミ捨て場で拾つたテレビに、不気味な現象が起こるのを目撃する。怯えながらも、部屋から逃げ出すのを躊躇する彼。本当に恐ろしいのは、亡霊か、生きた人間か？

駅から大分離れた場所にある、古びたワンルームアパート。その狭い一室が今の俺の住居であり、許された唯一の居場所である。

テーブルとソファーと冷蔵庫とテレビ。ほとんどその四つだけで構成されているような、殺風景で寒々とした空間。それが、今の俺が維持していく、ギリギリの脆い繩張り。

深夜一時五十分。

俺はいつものようにソファーに沈んで、ぼんやりとテレビの画面に目をやっている。

ブラウン管の向こうでは、タレントが築地の高級寿司を口にして、大袈裟な仕草で舌鼓を打っている。

(築地か…。しばらく行ってないなあ)

ぼんやりとそう考えた後で、思わず自嘲気味に吹き出しちしました。

築地も何も、この町内を最後に出たのはどれくらい前だ?…暫く、部屋から出た記憶さえない。

俺は込み上げそうになる焦りと敗北感を殺し、ただ力無く唇を歪ませた。途端に胸に満ちる、冷たく渴いた深い諦め……。

ほんの半年ほど前まで、俺はある有名企業で働くサラリーマンだった。

仕事は大変だったが、自ら望んで入った職場だ。やり甲斐に満ち溢れていたし、忙しさに見合うだけの収入も充分に得ていた。

清潔で見栄えのいいマンションに住み、人目を引く車を運転し、洒落た店で優雅に酒を楽しむ。

当たり前すぎて、永遠に続くことを疑いもしなかった、そんな日

々。

だが、転落の穴など、いつどこに開いていても不思議は無かつたのだ。

俺の場合は、春に移動になつた新しい部署。そこにいた部長の存在。それこそがぽつかりと開いていた、暗い転落の穴だつた。

妬みつぼく陰湿で執念深い、けれど権力を持ち恐れられる中年男。そんな人間に目の敵にされたことが、俺の運の尽き。裏では部長の陰口ばかり叩いているくせに、部署の連中はあつという間に俺の敵に回つた。部長に目を付けられないように。部長の機嫌を損ねないように。

嫌つていとも、蔑んでいとも、『長いものには巻かれとけ』……ってことだ。

子供の虐めばかりが取り沙汰される昨今だが、大人社会における虐めは、より根が深く残酷なのだと俺は思い知らされた。

結果から言えば、理不尽な攻撃に憔悴しきつた俺は、会社を自主退社する他なかつた。

俺は負けたのだ。

負けて、全てを失つた。

時計の針が、一時五十九分を指している。俺はじつとテレビ画面を注視したまま、体がひどく急くなるのを感じていた。

綺麗に映つっていたテレビ画面が乱れ、ザザ……ザ……といづれかいついたノイズの音が耳を擦る。

タレントの顔が歪んで途切れた後、しばし砂嵐が流れてパツと画面が切り替わつた。

そしてテレビ画面に映し出されたのは、紛れもない、今俺のいるこの部屋。

(始まつた……)

この奇妙な現象は、「ミミ捨て場からテレビを拾つて帰つたその日から起こつていた。

傷だらけではあつたが、決して古い型ではなかつた、捨てられたテレビ。惨めな気持ちを殺して部屋に運ぶと、線を繋ぐだけで簡単に映つた。

陰鬱な室内に音が響いたといつだけでも、ずいぶん救われた気持ちになつたものだ。

…しかし、その日の深夜一時ぴつたり。見るともなくテレビを見ていた俺は、突然乱れた画面がいきなりこの室内を映し出すのを目の当たりにした。

驚いた俺は、部屋中をひっくり返して隠しカメラを探した。手の込んだ、ひどい悪戯だと思ったからだ。

しかし努力も虚しく、カメラの影すら見付けることは出来ず。知人や警察に相談する気力も無いまま、謎の盗撮者に怯える日々は、一週間も続いたどうつか?

ある日の深夜、俺はほんのふとした拍子に、テレビの中からじつとこちらを見詰める『それ』の視線に気付いた。

毎夜続く怪現象に人の手が入つていないと悟つたのは、その時だ。

『それ』は、長い髪を垂らした若い女だった。

あちこち破れ、赤黒い泥に汚れたワンピース。服が体にぴつたり張り付いてしまつているのは、全身が滴るほどにずぶ濡れになつているからだ。

二チャヤリ。

実際はテレビから音はしない。それは俺が想像した音。

二チャヤリ…二チャヤリ…。女はべつたりと床の上に腹這いになり、まるで芋虫のように、弱々しく体をくねらせていた。

薄い布地越しに見える体のラインは恐ろしく細く、顔も腕も脚も

紙のようになじむ。その白と濡れて乱れた黒髪との対比が、あまりにも生々しくてリアルで…。

最初に女がいたのは、玄関に続く廊下の奥だつた。ただでさえ暗い上に、溜め続けたゴミ袋の山に隠れて、その存在に気付けなかつたのだ。

驚愕に震えた俺は、悲鳴を上げることも出来なかつた。後ろを振り返つて廊下を確かめたが、そこにはいつも通り、薄暗い空間が広がるばかり。

(見間違い?)

俺はテレビに向き直る。

廊下の隅の暗がりに…

…。

……やはり、いる。

俺は繰り返し、テレビと廊下を交互に見直した。テレビの中の俺も、全く同じ動作で狼狽している。

テレビにはリアルタイムで俺の部屋が映つているのに、まるで間違い探しのように、女の存在の有無だけが違う。

俺は頭を搔きむしつた。

カメラも無いのに自室を映すテレビ。テレビの中から見詰める不気味な女。理不尽な事態に混乱して震え、俺はよろめいてテレビから後退つた。

とにかく外へと、本能的に玄関へと逃げ出した時、俺は靴箱の上の鏡を見てハッと立ち止まつた。

後から思えば、そんな状況で足を止めたこと事態、異常な行為ではあつたのだが。

玄関にポツンと掛けられた鏡の中に、俺は己の姿を見て愕然としたのだった。

それはみすぼらしい、枯れ果てた、ボロ屑のような、強張つた青白い男の顔だった。

コレガ、今ノ、俺。

明確に意識した瞬間、言ひようのない恐怖心がドッとなだれ込み、冷たい汗が噴き上がつて額を流れた。

洗面所にも鏡くらいはあつたし、自分の顔を見たのが久々だったというわけではない。

その鏡が、玄関にあつた物だつたから。

自分が今外に出ようとした瞬間、だつたからこそ、俺は自分の姿を思わず客観的な視点で見てしまったのだ。

(こんな姿で外に出る? この惨めな様を世間に晒す?)

ありえない。

ありえない、ありえない、ありえない!

俺は玄関から外に出ることも、テレビのあるリビングに戻ることも出来ず、頭を押さえて悲痛な呻き声を漏らした。

どうすることも出来ずに狭い玄関で悶え、へたり込んだ時には低い嗚咽を漏らしていた。

玄関とリビングの間で一つの巨大な恐怖に挟まれ、俺はじわじわと狂つていったのだと思う。

俺はソファーで力を抜いたまま、じつとテレビの女を見ている。女はいつも小刻みに蠢いている。それは寒さに震えているようでもあり、痛みに悶えているようでもあり……。

血走った、けれど感情の込もらぬ、死人の目。

ただ震えているだけのように見えた女は、実は少しづつ少しづつ、前進していく。腕の力だけで固まつた体を引きずるように、醜い動作でゆづくりと這い進んできていた。

最初玄関近くにいた女は、今や廊下を渡り切り、よつやくコビン  
グの入口にまで到達していた。

(こいつが俺の所にまで着いたら…その後は…)

テレビの中にだけ存在していた女は、その瞬間実体となつて俺の  
首を掴むのだろうか？

俺はその場面を想像しながら、女の濁つた目をぼんやりと見詰め  
た。

見詰めているうちに、想像は過去の回想へとすり変わつていぐ。  
それはどれも辛く苦い、精神を切り刻まれるような屈辱の思いが出  
かりだ。

ああ、と俺は呻いた。

(お前の目は、あの時の俺の目にそっくりなんだ！)

部署内の他人のミスが、いつの間にか俺のミスに仕立て上げられ  
ている。正当な抗議をしているのに鼻で笑われ、自身の失態も認め  
られない愚か者と罵られる。

手柄を立てる機会は根っこそぎ奪われ、積み重なつていぐ大小のミ  
スミスマシス。

上層部の人間から、俺に対する信頼が落ちていく。それを痛いほ  
どに感じるのに、部署内の俺に対する仕打ちを証明することが出来  
ない。

周到に練られ、確実に俺を絡め取る悪意の触手。

遊び感覚で奪われていく今までの地位。勉強を積み、寝る間も惜  
しみ、コツコツと積み上げてきた苦労の結晶だったところに。  
自分に関係無いトラブルで怒鳴られる毎日を送るうちに、俺はい  
つしか瞳の輝きを失つていった。

それこそ、このテレビの中の女のよう。

パキン。

小さな家鳴りが鼓膜を震わせ、俺はふと我に返つた。

テレビに意識を戻す。

画面に映る俺の間近に、女が迫ってきていた。

手を伸ばせば、もう触れられるかもしれない距離だ。

女の青白い顔が真っ直ぐにこちらに向かっている。充血した目が、今にも血を滴らせそうだ。

半開きになつた紫色の唇がワナワナと震え、硬直した体を必死にのたうたせて近付いてくる。

俺は喉が引き攣るのを感じた。

怯えて悲鳴を上げそうになつたわけではない。

堪らなく、おかしさが込み上げてきたのだ。

だつてずいぶん奇妙な取り合わせじやないか？

死んでも尚、この世界に未練を残し執着する女と、生きてはいるが、現実に絶望し全てを諦めてしまつた男。

体が死んだ者と、心が死んだ者。

(どつちの方が、より不幸で哀れだ?)

思つた瞬間、喉から堪え切れない笑いが溢れた。引き攣つた喉が

喘ぐように震え、俺に甲高い狂人の馬鹿笑いを上げさせる。

(醜い死靈となつても、まだこの世を恋しがつてすがり続ける、哀れな女)

息が止まりそうな爆笑の発作、掠れた激しい笑い。

(命を持つてゐるというだけで、他には何も無い俺。恋しいモノもするがるモノも何も無い哀れな俺)

爆笑、爆笑、爆笑。

(より哀れなのは、救いが無いのは)

爆笑、……そして、涙。

狂つた笑いの発作を止められない俺を、朽ち行く女がじつと見ている。

汚水を滴らせ、青冷めて虫のようになっていた女の死人そのものの顔に、初めて感情らしきものが宿つた。

女の、濁った目に宿つた初めての意思表示の光。

それは、紛れもない、俺に対する恐怖と哀れみの感情だった。

(後書き)

読みで下りて、本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4278b/>

---

MIDNIGHT・TV

2010年10月8日15時45分発行